

●わたしはなぜ教育の道を志したか

—連載75—



武内 清

私の場合、なぜ教育学の研究者になったのかと人から聞かれても、明確に答えることができない。気がついたら、大学で教育学（教育社会学）を教えるようになっていたというのが正直なところである。

大学には最初は理系に入学したが、自分には合わないと感じ、3年次に教育学部に進学した。私が学んだ1960年代の東大の教育社会学コースでは、主任の清水義弘教授は中央教育審議会の委員をしてマンパワーポリシーを先導していた。松原治郎助教授は『日本の社会開発』（福村叢書、1968）という本を出版し、社会開発への教育の役割を提起していた。両先生の関心はマクロな教育政策にあ

り、ミドルの学校やミクロな人の心理には向いていなかった。それらは私の関心を引かず、当時は教育の本は読まず、小説ばかり読んでいた。

大学卒業後の進路先も決まらぬまま4年の9月になり、中学校に教育実習に行った。それは楽しいものだった。当時たまたま木原健太郎著『教育課程の分析と診断』（誠信書房、1958）を読んだ。教育社会学にもこんなにおもしろい本があるのかと思った。その内容は、木原教授が名古屋の小学校のクラスに入り込み、エスノグラフィの手法で、児童の実態やその家庭背景を調べ、自ら作ったアナライザーも使い授業分析をするもので、学級の中で起こっていることが児童の生活のデータも含めて生き生きと描き出されていた。感激のあまり小学校で調査の真似ごとをし、そのデータで卒論を書き、大学院に進学した。

大学院では、お茶の水女子大学の河野重男教授の演習もあり、「学校社会学」のおもしろさを学んだ。特に高校研究や生徒文化研究に興味をもった。6月に「東大紛争」が起こり、全学ストになり、ほとんど研究もしないまま1年間が過ぎ、短期間で「学級集団の研究」というテーマで、英米の学校社会学の研究を参照し、学級集団を教師と児童生徒の文化葛藤からみる視点で、修士論文を書き上げた。

博士課程のとき、私立の開成高校の「倫理社会」の非常

勤講師として半年間、教壇に立った。当時受験競争の真つただ中の時代で、受験に翻弄される高校生の姿を目のあたりにした。成績上位の生徒は受験中心の高校生活になんの疑問も抱かず、中位の生徒は受験を適当にやり過ごし、下位の生徒は無気力になっていた。

研究室の助手時代は、清水教授の科研費の研究「高校の適正規模の総合的研究」を手伝った。当時第2次ベビーブームの生徒のための高校増設期で、どの規模の高校が適切かをデータで検証する時代になった研究だった。全国の高校生のデータをもとに、高校の規模別に生徒の学校生活が違うかを検証したが、一定の傾向が見いだせなかった。しかしそこに「高校間格差」という変数を投入してみると、はっきりした傾向が見いだされた。格差の上位の高校は伝統もあり指導が確立しているので学校規模が大きくなっても問題がないが、新設校で大規模校を作ると伝統もなく教員の意思統一ができず指導が行き届かず生徒は荒れや不適応を起こしていた。この研究から、マクロな教育制度が、ミクロな生徒文化や生徒の学校適応と密接に関連していることを知った。

東京の中堅の武蔵大学に専任講師として勤めるようになって、ゼミの学生たちと、大学生の学生文化の特質をデータで明らかにした。例えば、学生の席の位置と受講態度や

日頃の行動やファッションとが関係するという仮説で、³³教室で席別に100名余の学生の受講態度とファッション、日常生活を観察とアンケートで調べた。

上智大学に移ってからは、研究仲間と大学間の学生調査を4回実施し、学会発表、報告書、本『キャンパスライフの今』（玉川大学出版部、2003）、「大学とキャンパスライフ」（上智大学出版、2005）を出版した。文科省主導で高等教育の改革は急速に進んだが、そこに学生の実態に関する視点が欠けていることを感じた。同じ大学生でも、大学の類型により、学生の学習動機も学生文化も大きく違っていた。学生の実態から大学教育の在り方を探った。

敬愛大学教育こども学科に勤め、教員養成の学科に入學してくる学生は、子ども好きで素直な学生の多いことを感じた。遠隔授業で、学生に読解力、文章力のあることも知った。教員養成の大学が、学生を熱心に指導すれば、これからの日本の教育は安泰なのではないかと感じた。

私の研究を『学生文化・生徒文化の社会学』（ハーベスト社、2014）にまとめたが、主に調査データや生徒や学生の実態から教育の在り方を考えるものであった。

たけうち きよし 1944年千葉県生まれ。東京大学大学院修了。武蔵大学講師・助教・教授、上智大学教授歴任。上智大学名誉教授、敬愛大学客員教授。